

「神を知り、神をあがめる」(ローマ一・一八～三二)

1 信仰による救い

ローマの信徒への手紙を学んでいます。三回目です。その書き出し、いわば序文から本論(一・一六以下)に進みつつあります。

今回は「福音」というのがキー・ワード〔鍵となる言葉〕だということを申し上げました。そしてそれは御子に関すること(一・三)、いな御子イエス・キリストその方のことだとも申し上げました。もう少し、内容を補って言えば、イエス・キリストを通して、その十字架の死と復活によって神の救いが示された、これを信じるならば、だれでも救いにあずかることができるということです。これを先週の聖書で確認すればこうです。

わたしは福音を恥としない。福音はユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。福音には神の義が啓示されていますが、それは、はじめから終わりまで、信仰を通して実現されるのです(一・一六～一七)。

ここに言われていること、神はイエス・キリストによって救いをもたらしてください、それを信じ受け入れるならだれでも救われる、これこそまさにローマ書の主題とすべきものです。この主題がくり返し語られます。この後一番早く出るのは三章二二節以下です。

ところが今や・・・神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です(三・二一～二二)。

はじめから聞いて理解してもらうためには少し難しいことを申し上げています。ご容赦ください。

要するに、ローマの信徒への手紙の主題が一章一六～七節にはじめて述べられ、それが次に三章二二節以下にまとまって出てくると申し上げています。このことは今日の箇所を理解するのに必要なことです。

別な言い方をすれば、今日の箇所をふくむ、一章一八節から三章二〇節までの箇所が、いま申し上げたローマ書の一番大切なメッセージによって囲まれていることに注意してほしいということです。

こう言ってもよいかも知れません。一章一六節で、パウロは、福音という神の光をかかげます。するとそこに、人間の闇の部分、残像のように見えてくるのです。確かにこの闇は追い払われた闇です。光こそ、たとえそこに闇が残っていても、真理であり、道です。克服された闇です。しかし同時に闇は闇として、リアルに(現実として)パウロには見えているのです。

もう一つ、これも少し面倒なことですが、ぜひ申し上げておきたい、理解していた

だきたいことがあります。

それは、一章一六節にあつた言葉に關してです。そこに「ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに」とありました。この言い回しに慣れていただきたいということです。

似たような言葉として先週取り上げた箇所「ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも」（一・一四）というのもありました。こちらのほうから説明すれば、パウロのこの言葉には当時のギリシア人の世界観が反映しています。ギリシア人は世界を、あるいは人類を二つに分けて考えていました。つまり、ギリシア人と未開の人（バルバロス）です。この二種類から成り立っている。その基準は、知恵があるか、ないかです。

これに対してパウロは、別の世界観、聖書の世界観を示しています。彼は神の救いという観点から人類を見ています。そうするとユダヤ人とそれ以外として世界は見えてきます。この、それ以外を表すのに、ギリシア人という言葉が使われています。聖書では異邦人とも呼ばれます。

救いに関してはユダヤ人が優先されます。その後には異邦人です。そこには順序があります。人類の救いのために神は、まずイスラエルを選び、律法を授け、御心を明らかにしたのです。「ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも」という表現は、間違っていないのです。

しかし注意したいのは、そうした救いの順序を残しつつも、信じる者すべてにとパウロが続けて言っていることです。パウロは人類を、ギリシア人のように知恵ある者となし者に分けることをしません。それだけでなくユダヤ人と異邦人の区別も、じつはない。人は救われるべきだということから見れば、人間に区別も差別もない。だれかに有利な点があるというのではないのです。人間の功德（くどく）も問題にならない。ただ信じること、アーメンと言つて神の差し出したものを受け入れること、そこに救いがあります。救いは下から、つまり人間からではなく、上から、神から与えられます。そこにキリスト教信仰の普遍性があります。

2 人間と世界の現状

御子イエス・キリストによつて救いが示された。福音が明らかにされた。信じる者だれにも与えられる。さてそれなら、救われるべき世界、人間とはどのようなものであつたのでしょうか。

不義によつて真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されました。なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従つて、彼らには弁解の余地がありません。なぜなら神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえつて、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなつたからです（一八〜二一節）。

ここでパウロが語り始めたのは、ユダヤ人のことではなく、異邦人のことです。ユダヤ人のことは二章以下です。

パウロは、ユダヤ人でなくとも、聖書の神をもとと知らない者でも、ですから私も日本人も入るわけですが、神について、世界の創造者としての神については知りえなし、知りうるのだと言っています。

昔から、自然の摂理や美しさ、人体の神秘などを神の創造と結びつけることは、なされてきたことです。アメリカの宇宙飛行士が、宇宙から帰還して、その多くが、説明しきれない美しさや神秘さに、創造の神のことを語るところを、立花隆さんの本（『宇宙からの帰還』）で読んだことがあります。ここでパウロが書いていることも無関係ではないでしょう。

この神を救いの神、イエス・キリストの神とまでは認識しないとしても、その手前の創造の神については、人はだれも知っているのではないかということです。知っていて神をあがめることも感謝もしない、真理に背を向けて歩んでいる、というのがパウロの見る、この世界と人間の姿なのでした。

しかしパウロの観察はそれにとどまりませんでした。人はまことの神を知らながら神としないだけでない。むしろ、神の代わりのものを考え出し、つくり出し、その奴隷となっているというのです。やがて偶像礼拝に行き着く人間の在り方も、パウロは描き出しています。

自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため彼らは互いにその体を辱めました。神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拜んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべきです。アーメン。・・・彼らは神を認めようとしなかったので神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようにしました。あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、人をそしり、神を憎み、人をあなどり、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、無知、不誠実、無情、無慈悲です・・・（二三～三一節）。

ここに描き出されたような人間の姿は、パウロによれば、人がまことの神を神としないことから生じるのです。

この後半（二九節以下）には、何と二十一もの悪徳が列挙されています。当時存在した通俗哲学の悪徳表など、パウロは用いたと言われています。しかしそれをそのまま借用したわけではありません。それらはすべて、本当のところ、まことの神を神としないところに生じてこざるをえないものであったのです。

3 神からの救い

いまお読みした二三節以下、ここで目立つ言葉の一つは、「まかせられ」です。二

四、二六、二八節です。「神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ」、「神は彼らを恥ずべき情欲にまかせられました」、さらに「神は彼らが無価値な思いに渡され」とあります。

パウロの見るところ、神の裁きとか、神の怒りというのは、世の終わりに、いわばまとめて注がれるというわけではありません。「神は天から怒りを現されます」と一八節に現在形で書かれている通りです。

その神の怒りは、人を、欲望の赴くままに任せておく、放置するという仕方で見えます。その人はきつと、自分の思うままに、それこそ自由を謳歌し、振る舞っていると考えているのではないのでしょうか。しかしそのようにさせておく、そこから生じる「当然の報い」（二七節）もふくめて放置しておくこと、自由へと罰すること、そこに神の底知れない怒りがあるのです。

有名な放蕩息子のお話（ルカ一五・一一以下）の場合も同じでした。あの父の弟息子は、父のもとを離れ、持参したお金で、自由な生活を謳歌します。やがて彼は全財産を使い果たし、豚飼いまで身を落とす、食べ物も盗んで生きていかざるをえなくなります。父は弟息子が帰るのを待ってはいませんが、助けに行こうなどとはしないのです。息子は、自らの自由の自由を任せられます。そしてその「当然の報い」を食らうことになるのです。彼は自由という裁きを受けるのです。彼が帰ったとき、そうして報いを受けた息子を、父は更に罰することはしませんでした。彼は自由において十分に裁かれたのです。必要なのは赦しです。彼は受け入れられます。

そのように考えれば、パウロは、今日の箇所、人間の罪の深さと、神の恐るべき怒りを描いていると言わなければなりません。今日の箇所の締めくくりに、次のように書いています。

彼らは、このようなことを行う者が死に値するといふ神の定めを知っていないながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています（三二節）。

そうしたことを行う者は「死に値する」、この「死」は、永遠の死、人間の滅びにほかなりません。

人間も、先に列挙されたことが悪いことだということ、神の御心に適わないということをよく知っています。しかしそれをやめない。やめないどころか、他人の同じ行為を是認し、罪と悪の連帯に生きようとするのです。

このようなものがパウロの見た人間、人間世界でした。人間は、なるほど天使のようなどきもあります。しかしその同じ人間が悪魔とも化します。そのような人間によってこの歴史は織りなされていきます。そこから、まことの神を神として、これをあげ、従うというようなことが、自然に起こってくることなどありうるのでしょうか。ありえないことのように見えます。少し後でパウロも一章一八節〜三章二〇節までを「皆、罪のもとにある」（三・九）と総括しています。しかし同時に聖書が私どもに語っているのは、そして私ども聞き逃してならないのは、私どもの外から、つまり神から、御子イエス・キリストによって、人の救いの道が私どもに示されているということです。何という恵みでしょう！ 私どもこの神の恵みに固く立ち、とどまり、歩みたいのです。

（二月二二日）